慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾図書館蔵『八幡大菩薩御縁起』解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2001
Jtitle	三田國文 No.33 (2001. 3) ,p.38- 45
JaLC DOI	10.14991/002.20010300-0038
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20010300-0038

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵『八幡大菩薩御縁起』解題・翻刻

石川　透

解題

室町物語『八幡宮縁起』は、『八幡大菩薩御縁起』系統と、『神功皇后御縁起』系統の二つのに分けられる。どちらも室町時代の古写本がいくつか現存し、それぞれがさらに細かく分類できる。

本書は、『八幡大菩薩御縁起』系統のうち、天理図書館に伝わる享禄四年（一五三一）写本の系統に属す写本である。書写年代も享禄本とさほど変わらぬ時期のものと思われる。古写本として重要であるので、ここに翻刻紹介する。

本書の書誌は以下の通り。

所蔵、慶應義塾図書館
番号、一一〇X－五七六
形態、袋綴、一冊
時代、［室町後期］写
寸法、縦三一・六糎、横一八・七糎
表紙、本文共紙表紙
外題、「八幡大菩薩御縁起」（打ち付け書き）
内題、「八幡大菩薩御縁起」
字高、二四・四糎
料紙、斐楮交漉紙
行数、半葉八行
丁数、二十二丁
奥書、「八幡大菩薩御縁起終　静間左近／重□（花押）」
印記、「慶應義塾図書館蔵」（朱印）

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「　」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。割字は小字にして示した。見せ消ちは《　》に入れ、補入は（　）に入れて示した。虫食い等による不読箇所は、□でおよその字数を示した。全体にわたり、片仮名は、大きさがまちまちであるが、翻刻で

は同じ大きさに統一した。

八幡大菩薩御縁起　彦波瀲武鸕鷀草葺不レ合尊

夫、吾朝、秋津島豊葦原中津国、昔、天神七代、地神五代、以上十二代ハ、皆神ノ御代也。彼（地）神第五之彦波瀲武鸕鷀草葺不レ合尊、第五ノ御子神武天子ト申ハ、人代之始也。彼帝ヨリ以来、人王十六代之帝位、応神天皇ト申ハ、今之八幡大菩薩之御事也。

御父仲哀天皇ノ御宇、二年癸酉、新羅国ヨリ、異敵ノ軍兵襲来テ、本国ヲ打取ントス。天皇勅テ曰、「皇后ノ宮、懐妊之皇子、若シ男子ナラハ、龍王之婿ニ成ヘシ。又、女子ナラハ、龍王之后ト云々」。然ニ、仲哀天皇九年庚辰二月六日、筑紫橿之日宮ニ於テ、程ナク崩御畢。

其後、神功皇后、新羅、白済、高麗等ヲ、打随エンカ為ニ、鎮西ヘ赴キ給ヒシ。羅勢門ヲ出セ給トテ、祈誓セ被レケルハ、「願ハ、天道、我ニ力ヲ添テ、彼異国之敵ヲ亡シテ、吾国安穏成ラシメ給」ト宣ヒシカハ、何クヨリ共ナク、白髪ノ老翁一人出来ル。

皇后、問テ曰ク、「何ナル老人ナルラン」ト。翁、答テ云ク、「君、新羅、白済等ヲ、打随ントテ、思召シ立セ給フ。翁モ御共申テ、御力ニ成リ奉ラントテ、参リ候」ト申ス。

皇后、御心ノ中ニ思食メス様、「彼老人之体、サシモ、吾力ニ成ルヘシトモ覚エス」ト思食シナカラ、「若、変化之物ニテヤ有ルラン」トテ、召具シテ、鎮西ヘ下セ給フ。

去程ニ、備後ノ泊ニ着カセ給シ時、長十丈計ナル牛、出来テ、皇后乗セ給タル御船ヲ、損サントス。其時、此老人、彼牛之角ヲ取テ、海中ヘ投入給。仍、此泊マリヲハ、牛満津橋ト書テ、牛満渡ト申ナリ。此牛ハ、島ト成テ、今ニ海中ニ侍リ。其ヨリシテ、皇后、此老人、実ニ恃シキ物ト思召テ、近ク召寄テ、何事モ委ク仰セ合セラル。

其後、文字関ヨリ上、大江崎ト申ス、泊ニ着セ給シ時、塩、悉ク暉ケリ。上テ船通フヘキニ有ラス。其時、此老人、只一人シテ、彼船共ヲ澳中ヘ、皆々押出シケリ。此時、皇后、弥、憑シキ事ニ思召タリ。

豊前国船ナ山ノ木ヲ伐リ、宇佐郡ニテ、船四十八艘造テ、則、志賀島ニテ、船ニ乗ル兵、一千三百七十五人也。大将軍ハ、住吉、並、高良之大臣也。梶取ハ、志賀島大明神ナリ。

去ル程ニ、皇后、御船ニメサレ、葦屋津ニ着給シ時、此泊ニテ、彼翁、弓矢ヲ取出テ、射侍ケルヲ、御覧スレハ、行末モ了モナキ岩崎、十丈計サシ出タルヲ、引絞射タリケレハ、物ニテモナク、射透シケリ。皇后、是ヲ御覧シテ、最ト御意増ニ思召ケリ。

其後、賀須井ノ浜ト申処ニ着キ給フ。皇后、老人ニ仰ラル、様、「新羅、白済国ヘ渡リ付テモ、彼異敵共ヲハ、何カシテ打随ウヘキ共覚エス」ト仰ラレケレハ、老人、申様、「是ヨリ西ニ、志賀之浜ト申処候。彼島、安曇ノ磯童ト申ス物アリ。此童ヲ召テ、龍宮城ニ遣シ、乾殊満殊ト申ス二ノ玉ヲ、借シメ給ヘ。此二ノ玉タニモ候ワヽ、彼国ヲ責随ン事、最ト安事ニ候」ト申ニ、皇后、仰ラレケルハ、「件之童ヲハ、如レ何シテ召スヘキソ」ト仰ラレケレハ、老人申ク、「件童ハ、精納ト申ス舞ヲ、殊愛シ侍

ル也。此舞ヲハ、又ハ、彼納舞トモ申也」。「但、此舞ヲハ、誰人カ舞フヘキ」ト仰アリケレハ、海中ニ舞台ヲ構エテ、此老人、彼ノ舞ヲマヒスマシケリ。其舞台ハ、石ト成テ、海中ニ今ハ在リ。

其時、安曇ノ磯童、此マヒヲ愛セント□、船ニ乗テ、舞台近ク出来レリ。皇后、老人ニ仰有リケルハ、「件玉ノ事、彼童ニ申スヘキ」由、仰ラレケレハ、老人、童ニ申テ云ク、「汝ヂ、未知スヤ。日本国、本意ヲ遂ケン為ニ、新羅、白済エ渡セ給。日本之内ニ居ナカラ、国王ノ仰ヲハ、何カ背申スヘキ。早ク、御力ト成リ奉テ、彼国之物共ヲ、打ヘキ」ト申テ、則、龍宮城エ行テ、龍王ニ、件由ヲ申テ、此二ノ玉ヲ借リ得テ、次ノ日、早旦ニ帰テ、皇后ノ御前ニ持参仕タリ。其時、皇后、御感ナノメナラス。

去程ニ、皇后ハ、暫ク、対馬国ニ立寄給。彼所ニ、白キ方ナル石アリ。皇后、大菩薩ヲ懐妊シ奉リシニ、此石ニ、御腹ヲ冷シテ、「若、胎内ノ太子、日本之主ト成ルヘクハ、今一月産ルヘカラス」ト誘給テ、御記文ニハ、「此石ヲ、我体ト思ヘシ」ト云々。

御腹ノ中ニ座マス皇子ニ、仰ラレケルハ、「吾、異国ヲ打随ンカ為ニ、是マテ渡レリ。汝、必、帰朝之後、生レ給ヘ」トテ、裳ノスソニ石ヲ裏テ、御腰ニハサマセ給テ有シハ、此石之事也。故ニ、御誕生ナカリキ。

皇后、忽ニ男ノ形ト成リ、白済国ヘ渡リ給ケリ。御方船、四十八艘ニ乗ル。軍兵、一千三百七十五人也。異国兵船、十万八千艘、軍兵、四十九万六千余人也。

彼国之国王、大臣、嘲弄シテ云、「日本ハ賢国也。何ソ女人ヲ大将トスルヤ」。則、彼国之軍兵共、雲霞ノ如ク責来テ、皇后ノ御方ヲ打取奉ラントス。

其時、乾殊ヲ海中ニ入給シカハ、大海忽ニ暉上テ、平々トシテ、陸地ノ如ク乾ケリ。彼国ノ物等、悉ク悦テ、皇后ヲ打奉ラントテ、塩暉ニツイテ、追カ、リシ時、旱殊ヲ取上テ、満殊ノ玉ヲ下シ給シカハ、浪、蓬萊ノ如ク立来、大海、本ノ如クニ満シカハ、異国怨敵共、皆悉ク塩水ニ漂テ、一人モ残ラス死失畢。

或縁起ニ云、「肥前佐賀郡ニ御座マス河上宮ニ、彼ノ二ノ玉ハ納ル。長サ五寸計、頭ハ二寸計、尾ハ小キ玉也」。

仍、皇后、本意ヲ遂ケ、異敵ノ軍兵、悉ク打亡給フ。彼国ヲ随テ、仰ラレケルハ、「我、他国ニテ、既ニ幾多之人ヲ殺ス。殺生ノ名ヲ上ン事、由無」ト思召テ、御嘆有シカハ、二龍王、海中ヨリ出現シテ、件ノ死人ヲ、一人モ残サス食失ヒ畢。仍、殺生ノ嘆ヲ思召サレケル故ニ、放生ヲ行給云フ。然ニ、今、放生会ハ、異国之死人ノ孝養也。其時、彼国ノ大王、誓ヲ立云、「我等、日本国ノ犬ト成テ、彼国守護シ、全ク懈怠有ルヘカラス。若、敵心有ハ、天道之責ヲ蒙ラン」ト云々矣々。

皇后、石上ニ、「新羅国ノ大王ハ、日本之犬也」ト書付玉フ。日本ノ軍兵、帰朝ノ後、「此石ノ銘文、我国ノ恥也」ト、削失ハントスルニ、弥ヨ鮮也。薬ヲ塗テ焼トモ叶ワスシテ、今ニ文アリト云々。

稽首八幡大菩薩　示現神通度衆生
断除十悪為十善　覆護衆生能与楽

其後、皇后、彼国ヲ打随エテ、筑紫ノ国ニ帰付給、十日ト申

ニ、鵜ノ羽ヲ以テ、産屋ヲ作給テ、槐木ニ取付カセ給テ、皇子ヲ産給シ間、彼所ヲハ、産ノ宮ト名付タリ。今、宇佐宮、是也。

王子、御誕生ノ時ハ、十二月十四日辛卯日寅時也。其故ヲ以、卯日ハ、大菩薩ノ御縁日ト申也。十二月十四日、御誕生会ト申□□御神事行テ、今ニ侍リ。産宮、南ヲ受ルナリ。

日本記云、「皇后之ツキ給エル御鉾ヲ、後ノ世ノ験ノ為ニトテ、新羅王ノ門ニ立ラレテ、今ニアリ。然ニ、明ル年ノ春二月ニ、皇后、都ヘ向ヒ御座ス。賀御逆之雄四熊王弟也。皇子ノ都ヘ向キ事ヲ聞テ、潜ニ待ツ。皇后、此由ヲ聞召テ、武内ノ宿禰ニ仰テ、彼王ヲ打奉ラン」ト云云。

其後、約束ノ如ク、龍王ノ婿ニ成リ、備後ニテ、若宮ヲ生ミ給フ。今ノ仁徳天皇、是也。

其ヨリ以来、龍王ノ御孫タルニ依テ、蛇ノ尾有ケリ。其尾ヲ隠サン為ニ、納尾垂ト申物、出来レリ。又、異国ヲ責給シ時ノ御裳ハ、今ノ宇佐ノ弥勒寺ニ納レリ。色モ文モ尚鮮也。

其後、件ノ処ヨリ一里ヲ去テ、皇后、御身煩給ン、御心地、例ナラス思召サレテ、「アナ侘」ト仰ラレタル処アリ。故ニ、彼所ヲハ、ワヒシト名付タリシカハ、今ノ世ニハ、タヒシト申付タリ。

其ヨリ一里ヲ去テ、「此日ハ、何時ニ成タルソ」ト、天ヲ仰セ給タリシ所ヲ、日守ト名付タリ。

其後、櫃日ノ宮ニ、着給テ、暫、日数ヲ経テ、王城ヘ上セ給テ、御年三十一ニテ、王位ヲ司ル。日本記曰、「仲哀天皇御宇、九年春二月ニ崩御シ給」ト云々。或説云、「眼ノ当テ、異国ノ矢ニ崩御シ給」ト云々。

竊ニ、天皇ノ骸ヲ、武内ノ宿祢、海路ヨリ、長門国豊浦ノ宮エ送ル。未天皇葬シ奉ラス。扶桑記云、「神功皇后、位ニ付給テ、其年御葬ヲハ、河内国長野山ニ移ス」ト云々。

国ヲ始給フ事、六十九年。其後、皇后、皇子ニ位ヲ譲給テ、御歳百歳ト申ニ崩御畢。又、皇子七十ニテ御即位、治四十一年也。

都大和国高市郡ニ、后八人、男女ノ御子、九人。今ノ八幡大菩薩ハ、此御門ノ御事也。

此御時、白済国ヨリ、色々ノ物師、博士ナントヲ渡ス。又、経典、吉馬等参リタリ。此御門ハ、仲哀天皇第四ノ御子、応神天皇ト申。其後、十善ノ位ヲ振捨テ、道心堅固ニシテ、山林ニ交給テ、定レリ処ナカリキ。

然ト雖モ、筑前国増富七郡内ニ、カスヤノ西川ト申処ニテ、戒定恵ノ箱ヲ埋テ、験ノ松ヲ立給エリ。彼験ト申ハ、松枝ヲ折テ、倒マニ立給ヘルカ故ニ、彼処ヲハ、筥崎ノ験ノ松ト申也。然ニ、彼松、権化ノシワサナリシカハ、生付テ、倒マナル松ニテ、今ノ世マテモ伝ル也。

其後、応神天皇、穂浪郡宮河ト申ス処ニ、暫ク渡給テ、豊前国宇佐郡内、本山ト申山ノ上ニ、御飾ヲ下シテ、其山ノ麓ニテ此分段ノ身ヲ捨スシテ、正覚ヲ成給フ処ヲハ、正覚寺ト名付タリ。

其時ノ御言ニ云ク、「我ヲハ、石体権現ト言ウヘシ」ト仰ラレテ、正覚成給テ後、彼山ノ頂上ニ、三ノ石ト成リ給エリ。其石ノヨリ、金色ノ光、都ニサシタリシヲ、仁徳天皇、是ヲ恠テ、勅使ヲ立ラレテ、尋ネサセ給程ニ、彼山ニ行テ、尋拝奉レハ、

金ノ鷹ニテ顕給。勅使、其山ノ麓ニ、宝殿ヲ作テ、崇奉ル。

其時、宇佐八幡大菩薩ト顕レ給エリ。但、八幡大菩薩ト名付ケ奉事ハ、彼戒定恵ノ箱ヲ埋、験ノ松ニ、天ヨリ、赤幡四、白幡四、此八ノ幡ノ降下シ間、彼松根ニ社ヲ造テ、赤幡ノ宮ト云二処ニ、其幡ヲ崇奉ル。本地、釈迦多宝也。

然ニ、八幡ト顕レ給事ハ、此八ノ幡ノ降タリシニヨリ、八幡大菩薩ト現シテ、「百皇守護之神ト成給ハン」ト、御託宣有ヲ、「大菩薩ノ本地、自在王菩薩」ト云テ、金泥ノ自在王経一巻ヲ、石ノ塔ノ中納給。

又、金泥ノ法花経一部ハ、彼戒定恵箱ノ底ニ埋テ、其上ニ石塔ヲ居エ給エリ。吾朝ニ、経教ノ渡給フ事ハ、此経一部一巻也。

其後、「天皇子生レラル、地也」ト仰ラル。聖徳太子ノ三粒舎利、彼赤幡ノ宮ノ御宝殿ニ納給エリ。筥崎ノ松ハ、東西ヲ受ル。

人王第三十代、欽明天皇、位ニ付給テ、十二年ニ当テ、始テ神明ニ顕給フ也。但シ、大宮司補任帳ニハ、僧聴三年トモ云。

豊前国宇佐郡、蓮台寺山ノ麓、小野ノ奥ニ、鍛冶スル翁アリ。其相貌太タ、兄ハ此義、弟ハ此類、奇異也。大神此類、是ヲ見付テ、只人ニ有ラスト思テ、五穀ヲ断チ、三年之間、給仕シテ後、御幣ヲ以祈請シテ云ク、「我、三年マテ、五穀ヲ断チ、篭居テ、給仕シツル者ハ、御相貌、只人ニ有ラサルニ依ナリ。若、神明ニテ御座マサハ、我前ニ顕レ給エ」ト申ス。

此時、翁、忽ニ失テ、三歳ノ小児ト顕ラハレ、葉ノ上ニ立給テ、託宣シテ曰ク、「吾ハ、日本人王十六代、誉田天皇也。我ヲハ、護国霊験、威力神通、大自在王菩薩ト云也。国々処々ニ、跡ヲ神明ニ垂始テ、顕御座マス也」云々。

其後、馬城峰ニ、石体権現ト顕給フ。大足姫、比咩之大神ト、権現ト、諸ロ共ニ、三処相並テ、御座在也。高サ一丈四五尺、広サ一丈計ニテ、顕給フ。何ナル寒雪ノ比モ、御体、尚暖ニ御座在也。但、人恐ヲナシテ、近付キ奉ラス。

御殿造リ、覆ケルニ、御託宣アリキ。「我、石体ト顕ル、事ハ、末代ニ至テモ、久シカラン為ナリ。此風ニ当リ、此流ヲクマン者ハ、必ス罪障ヲ滅スヘシ。御殿ヲ造、蓋フ事ナカレ」ト云々。

其時、国王ヨリ、六ケ年ニ一度、勅使ヲ立テ、国ノ政ヲ定ヲワシ御座。然ニ、此大菩薩、地ヲ離テ、上ニアカリ給フ事、一丈。形ナクシテヲワシ御座ト雖モ、物ヲ仰ラル、事、只ノ人ニ向エルカ如シ。

然ニ、称徳天皇ト申ス女帝ノ御門マシマシテ、彼御門ノ御時マテハ、物ヲ仰ラル、事アリシカ共、御門、涅槃経ノ文ニ曰ク、「所有三千界、男子諸煩悩合集、為一人女人之業障」トアリ。此ノ文誦シ給テ、「我、此文信セス。女人身也ト雖モ、我、全ク此儀ナシ。此経、即虚言也」トテ、彼経ヲ焼捨給ヒキ。

此過ニヨリ、淫欲ノ炎、忽ニ熾盛ニ成給テ、既ニ此道忍難シテ、諸国ニ宣旨ヲ成シ、「我思ヲ静ル物ヤ有ト、尋テ参スヘシ」仰有シカハ、諸国ニ是ヲ尋ルニ、河内国弓削郡ト申処ニ、宝金剛院ト申寺ニ、千日篭タリシ僧ヨク此寺ニテ、如意輪ノ法ヲ行ヒキ。

此経ノ故ニヤ有ケン、院宣之御使、此僧ノ有様ヲ見テ、左右ナク取テ参リ、又、何ニモ叶フマシキニテ有シカ共モ、勅定ナレハ、不レ及レ力ニ、彼勅宣ニ随ヒ、女帝ノ御門ニ参リニキ。

御門、実ニ御心相叶ヲワシマシテ、余ノ事ニヤ、八幡大菩薩

へ、和気ノ清丸ヲ勅使トシテ、申セタマフ様、「我、此僧ニ法王之《践》践ヲ与ヱント思候。如何候ヘキ」ト申セ給ヘハ、「王三代ニ下ヌレハ、即民ト成、民三代上ヌレハ、即国王トナル。争カ、賤キ身ヲ、忽ニ法王ノ践ヲハ、成シ玉フヘキ」ト仰ラレシ時、女帝ノ御門、重而、清丸ヲ以、仰有ケルハ、「今度、大菩薩、猶御承引ナシト云共、汝、我心ヲ知レリ。縦ヒ、叶ワス共、御領掌ノ由ヲ申」ト仰有ケリ。

然ニ、清丸、大菩薩ニ参テ、重而申入ト雖、更、御領掌ナシ。仍、清丸、「御門ノ御意ヲ背ン事ハ、当時ノ恐也。神慮ノ御知見ヲ背カハ、現当定テ其過有ルヘシ」ト思テ、件子細ヲ、直ニ言上セシメ畢。

其時、女帝御門、大ニ逆鱗アリテ、「汝、我心知レリ。何カ加様ノ御返事ヲハ申スソ」トテ、忽ニ、御不審アリテ、是ヲ切テ、空船ヲ作テ、此清丸ヲ乗テ、海中ニ放タレキ。

然ニ、此波ニ漂ヒテ、七日七夜ト申ニ、豊前国輪間ノ浜ト申処ニ着ヌ。其処ニ、忽ニ、鹿出来テ、清丸ヲ乗テ、彼大菩薩ノ御宝前ニ参リ、又二心ナク祈念シ奉ル。御殿ヨリ、五色ノ蛇出来テ、清丸カ膝ヲ舐ルニ、是、本ノ如ク出来ヌ。

但シ、昔ハ、六ケ年ニ一度、勅使ヲ立給シカ共、此大臣ノ時ヨリ、三ケ年ニ一度、勅使ヲ立給キ。宇佐ノ宮ハ、南ヲ受ク。

其時、和気ノ清丸、大菩薩ノ御宝ニ参リテ、件由ヲ申セハ、大菩薩、聞召、「我、衆生ニ向テ、物ヲ云事ハ、百王守護ノ為也。得道ヨリ以来、寂光城ヱ帰ラス、百王守護ノ霊神ト顕レ、加様ニ、衆生ニ言ヲ云ニ依テコソ、如レ此ノ非法ヲ行ツレ。須ク、我レ言語ヲ断テ、無言ノ身ト成ランニハシカシ」ト仰ラレテ、御詞ヲ止メ給ヒキ。其時ヨリシテ、八幡大菩薩ノ御物語ハ、障給ヒ畢。

其後、行教ト申上人、御座シテ、宇佐ノ宮ヘ参リ、二千日篭シテ、行給フ間、行法ノ薫修ヲ積給ヒシカ故ニ、此上人、向給テ、始テ文ヲ頌曰、

得道来不動法性　示八正道垂権迹
皆得解脱苦衆生　故号八幡大菩薩

行教、此文ヲ聞テ、随喜ノ涙ヲ流テ、弥、垂迹ノ貴キ事ヲ仰ク。雖レ然リト、大菩薩、「如レ此物ヲ仰ラレタリ」ト云事ヲハ言ワサリキ。

其後、筥崎ニ、戒定恵ノ箱ヲ埋給シ所ニ、験ノ松ヲ植タリト云事モ、此行教ニ向テ教給フ。自レ爾、行教、筥崎ニ行、彼験ノ松ニ、瑞籬ヲシメテヨリ以来、人皆、是ヲ知レリ。是ヨリ先ハ、更ニ、余ノ人知ラサリケリ。

其後、清和天皇ノ御宇、貞観十八年庚辰七月十五日、夜半ニ、彼行教ニ示現シ給様、「汝カ法、実ニ難シ」忘レ。最上ノ法味ナリ。願クハ、我ヲ王城近ク、石清水ニ渡スヘシ。我、即、国家ヲ鎮護セン」ト示現シ玉フ。

故ニ、行教、「王城ニ上テ、八幡大菩薩ヲ移奉ラン」ト思召テ、彼男山ニ至給シニ、八幡三所権現ハ、行教ノ衣袖ニ、弥陀ノ三尊ト現シテ、移給ヒシカハ、行教、感涙ヲ押ヱ、申サセ玉フ様ハ、「但シ、此山ハ、広候。何ナル処ニカ住マセ給フヘキ。示現シ給ヱ」ト有ケレハ、石清水ノ辺ニ、榊三本有リ。行教、是ヲ見テ、カシコニソ移奉給ヒシ。男山ハ南ヲ受ル。

其後、延喜ノ御門ノ御時、一人ノ大臣御座。平朝臣時平ト申

人、大宰大弐ト成テ、下ラセ給エリ。俄ニ、一任ヲ給テ、京ヱ上給ヌ。

此大臣、彼八幡大菩薩ニ歩ヲ運テ、立願有テ曰、「願ハ、我ヲ、今一度、大宰大弐トナサセ玉へ。若、所願成龍スルナラハ、必、御殿ヲ造改メ奉ラン」ト祈請シテ、七日篭テ、京ヘ上ラセ給テ、後、程ナク、又大弐ト成テ下ラセ玉ヒキニ、然ニ、此大弐、世間ニ打給テ止ニケン、是則、大菩薩ノ御利生、又、神慮ノ恵ト云コトヲ、更ニ忘タリケルヲ、女帝ノ御門之御願、観音寺ト申寺ノ、三千人講匠ノ内、唯一講師ト申僧ノ娘ノ、七歳ノ女子有キ。

大菩薩、此女子ニ付給テ、地ヲ上ル事一丈、空ヲ飛テ、大弐殿ノ御座ケル御前ニ行テ、御託宣ヲ成シテ、「爰ニ、汝、覚スヤ、如何□汝、京ニ侍リシ時、我御殿ニ、七日参篭シタリシ時、我ニ、願ヲ発シテ参ラセタリ。今此願力ニ依テ、茲ニ、大弐ノ職有。何ソ神恩ヲ忘テ、今此願ヲハ遂サルソ」ト、御託宣ノアリシ時ハ、延喜二十一年ノ事也。

実ニ、大弐殿、驚騒キテ曰、「実ニサル事候キ。凡夫、具縛ノ身ハ、世間ノ事ニ打マキレテ、此事、一切覚エス候。敢テ、神恩ヲ忘奉ル事ハ候ハス。然ハ則、御殿ヲヤ、造替候ヘキ。又、何ナル処ニカ、崇奉ルヘキ」ト申給シ時、重而、御託宣有テ仰ラル丶。「是ヨリ乾ノ角ニ、白シ砂羅ノ浜アリ。我、天下国土ヲ守護セシ始、戒定恵ノ筥ヲ埋テ、験ノ松ヲ立キ。故ニ、彼処ヲハ、筥崎ト名付ク。其松ノ根ニハ、八ノ幡降リタリ。其故ヲ以、八幡大菩薩ヲ、此処ニ祝ヘキ也。我御殿ノ正方ヲハ、乾ノ角ニ向テ、九間ニ是ヲ造レ。礎居ノ石面ニハ、異国ノ敵ノ名ヲ書ヘシ。是則、異国降伏ノ為ナリ。内廊外廊ヲハ、二陳ニ作、葺合（フキ）ニフキ、二階ノ楼門ヲ立ヨ。内廊ハ、諸神集会ノタメ、外廊ハ、被覆修行ノ者ノ料、二階ノ楼門ハ、王位威勢衰ヱ、人民ノ力尽ン時、定テ彼異敵出来ルヘシ。我、彼楼門ニ上テ、彼怨敵ヲ防ヘシ。他国ヨリハ、我国ノ人ヲ相論ン負マカサシト、我守ヘシ。人間ノ苦ハ、吾苦ナリ。我、別ノ栖家ナシ。正直ノ人頭ヲ住家トス。鉄（クロカネ）ノ熱ヲハ受トモ、不善ノ人ノ施ヲハ、受シト御誓アリ。但シ、我身ハ、五八月ニ□□彼処ニ顕向シテ、異国殺害ノ者、孝養スルナリ」ト、御託宣アリシカハ、彼大臣時平、筥崎キ参リ、速ニ御託宣ニ任テ、宝殿楼門、玉ヲ以瑩テ、鐘楼回廊ニハ、金銀ヲ鏤メ、加之、神富郡（カントヒノ）ヲ、社領ニ寄奉リ畢。彼宝社造営ヨリ以来、三百余歳ニ及ヘリ。

抑、八幡大菩薩、三所権現ハ、中ノ御前ノ本地ハ、是、大日本国ノ、人王十六代誉田天皇ノ御霊、当所ノ宝号ハ、広幡八幡大神也。

禰宜（キ）、鹿島ノ勝波（カツナミ）、豆米（ツメ）之時ノ御託宣ノ記ニ云、「我ヲハ、護国霊験、威力神通、大自在王菩薩、古仏垂迹、大悲菩薩ノ御身也。本地、阿弥陀如来。　西ノ御前、御垂迹ハ、人皇第一代、神日本磐余彦ノ天皇ノ御母、玉依姫ノ尊也。本地、大勢至菩薩。　東ノ御前、御垂迹ハ、人王第十六代、気長足姫天皇、開化天皇、吾世ノ孫、仲哀天皇ノ后、誉田ノ天皇ノ御母、神功皇后宮、本地、観世音菩薩也。　羅勢門ニ出来シ老人ハ、則、住吉大明神、本地、虚空蔵菩薩也。鹿ノ島ノ安曇ノ磯童ハ、島之鎮守大明神、本地、大聖文殊師利菩薩也」。

故ニ、今之ヲ案スルニ、大聖文殊ハ、仏在世ノ昔、海中ノ群

類ヲ教化シテ、霊山浄土ノ法会ノ砌ニ望マセシ。其中ニ、婆羯羅龍王ノ娘、年八歳ノ竜女、殊ニ、文殊ノ教化ヲ悟キワメテ、龍畜ノ姿ナリシカ共、忝ク、霊山会上ノ筵ニ、五障ノ袂ヲ脱捨テ、此身ヲモチナカラ、皇后ノ宮ニ力ヲ添テ、異国ヲ打随ンカ為ニ、龍女、輙ク、早殊満殊ノ宝ヲ借得タリシハ、皆是、昔ノ利生ノ故也。

然ハ則、八歳ノ竜女カ、「我献宝殊、世尊納受」ト云、尺尊ニ、如意宝珠ヲ奉リシカハ、世尊、是ヲ悦給ヒ、請納給キ。

今、海神ニ殊ヲ借得テ、皇后ノ宮ニ奉シカハ、皇后、是ヲ、中原四面、本領給キ。凡、昔モ今モ、其故ヲ思ニ、尤妙ナル物也。

但シ、彼筥崎ノ松葉、赤ミテ枯ナントス。筥崎執行安部ノ守、此松ヲ見テ申様、「此ハ、カツラノハイカ、リタル故ニ、枯タル也。是、断捨セン」トテ、此蘿ヲ切リタリケレハ、此松、即カレタリケリ。其松、枯ナカラ、三ケ年倒レス。然ヲ、此松ヲ切テ、根ヲ掘テ、竈殿ト云処ニ置ケリ。

其後、アラワナル松ノ根ヨリ、七八寸計ナル松、三本生出タリ。宮人、是ヲ見テ、此松ヲ掘切リ、打ノケテ取テ、昔ノ験ノ松ノ根ノ跡ニ植タリキ。然ルニ、件ノ松ノ本葉カレテ、只松生侍リケレハ、左右ナク生ツキテ、当時、四五丈ノ松ニテ、昔ノ験ノ松ノ様ニ、サカサマナル松ニテ立タリ。

実ニ、カヽル霊神、殊勝ノ処、不思義ナル霊地ナリト思召テ、禰生会ヲハ行セ給。

皇子、女子ハ、竜王ノ娘ノ腹ニヲワシマス。神ト顕給フ時、若宮殿トテ、顕テマシマス。去レハ、若宮ヲハ、夢ニモ稚キ児ニ見奉ナリ。

武内ノ本地、阿弥陀仏、因幡国、上宮、武内ノ本社也。件上宮ニ深山有。其山ノ中ニ、束帯正シテ、入給ショリ以来、帰給ワス。尋奉ルニ、山中ニ竹アリ。其葉ニ簡ヲ書ク。其銘文ニ云、「法蔵比丘、豈異人ナランヤ。弥陀如来、即我身也」云云。

八幡大菩薩御縁起終　　静間左近

重□（花押）

八幡大菩薩御縁起終

（いしかわとおる）